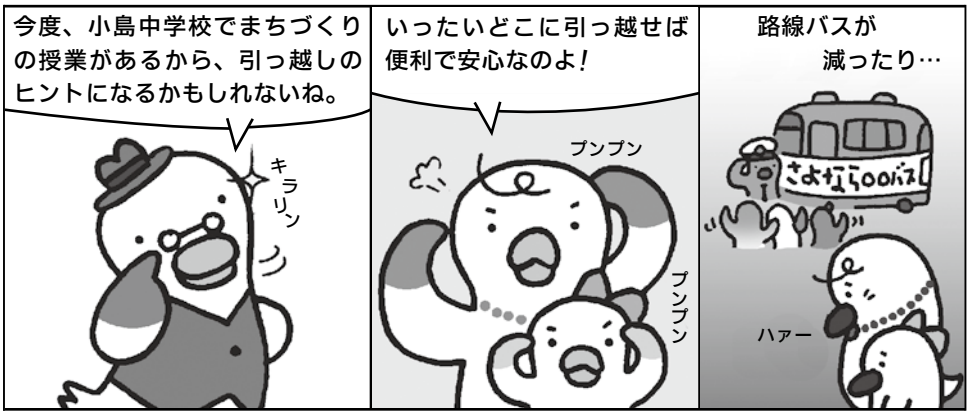
未来の長崎市はどんなまち？

これから先も、安心して快適に暮らせるようなまちにするにはどうすればいいのでしょうか。今、長崎市で進めている取り組みについてお知らせします。

長崎市の海が見える丘の上に暮らすカモメ一家は、今年の冬、引っ越しを考えていました。

後日、カモメ一家は小島中学校の授業をこっそり見に行きました。



「未来の長崎市を考えよう！」in小島中学校

20年後に社会の担い手となる中学生に向け、小島中学校で「人口が減っても暮らしやすいまちづくりとは」というテーマで、社会科の特別授業を開催しました。

授業には約120人の生徒が出席し、市職員から、20年後の長崎市の人口の変化や、市内に住む子どもや高齢者の割合の推移などについての説明を受けました。

また、「橋ができて生活が便利になった」「高齢者が増えた」など、小島のまちがどのように変わったのかなどの説明も受けました。

まちづくりについての講義

長崎市の現状を勉強した後、生徒たちは、まちづくりの課題と解決策をグループに分かれて話し合いました。

活発に自分の意見を出し合い、みんなで協力して進めたグループワーク。

話し合いで出た意見を付せんに書き、模造紙に貼っていきました。似ている意見などを整理したり、もっと内容を掘り下げたりして、グループの意見をまとめました。

グループワーク

【問い合わせ】
都市計画課
☎829－1169

グループで意見をまとめたら、いよいよ発表。

「大人と子ども、どちらも楽しめる場所をもっとつくってほしい」「長崎の坂の良さをPRしてほしい」「地域の狭いところを通るようなバスがあったら、高齢者も住みやすいのでは」などといった意見がでました。どの意見も、これから長崎市がどうやったら住みやすくなっていくか、今、何が必要なのかを考えたものばかりでした。

今回の授業の目的は「自分たちの住んでいるまちは、自分たちで考える」という当事者としての意識を持つというもの。社会科の先生は、「郷土長崎のまちづくりを通して、地域の政治に関心を持ち、暮らしやすい社会をつくっていく、そんな大人になる出発点となれば」と話しました。

グループごとに発表

授業を終えて

生徒のみなさんに特別授業の感想を聞きました。

天野さんは、「普段の授業と違い、自分が住んでいるまちの良いところや、もっとこうした方が良いところなどを知ることができた」「長崎市は外国人と触れあう機会が多いので、もっと、異文化交流を通じて、世界的につながるようになったらいい」と話しました。

天野 向日葵（ひまり）さん

「人任せじゃなくて、自分たちでまちのことを考えることが大事だと分かった」と山﨑さん。「長崎くんちなどをもっとアピールして、長崎は少し違うなと思われるようなまちになってほしい」と話しました。

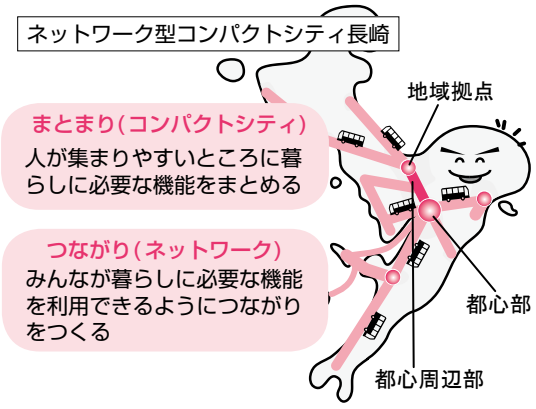
山﨑 成人（なるひと）さん

「大人になったら長崎の役に立てるような仕事がしたい」と将来のことについて話してくれたのは山口さん。「観光客でまちが賑（にぎ）わうのもうれしいけど、長崎市に住んでいる人にとって、住みやすいまちになってほしい」と話しました。

山口 仁愛（にな）さん

これから目指すまちのカタチ

長崎市では、今後20年間のまちの設計図として**「都市計画マスタープラン」**を立てています。



この計画のなかで一番大事なキーワードが**「ネットワーク型コンパクトシティ長崎」**です。

まず、コンパクトシティとは、人が集まりやすいところに、多くの市民が利用する大きな病院やデパートなどの、暮らしに必要な機能をまとめることです。

そしてネットワークとは、それらが集まる都心部、都心周辺部、地域拠点と生活の中心となっている地区を公共交通や道路、情報などでつなぐことです。

この2つを合わせることで、全ての市民が暮らしに必要な都市機能を利用できるようにします。決して全ての機能を都心部に集めるということではなく、エリアごとに必要な役割を持たせることで、地域の「個性」や「魅力」を引き出していきます。そうすることで、人口減少や少子化、高齢化が進む中でもみんなが安心して暮らせるようなまちづくりを進めていきます。